

チェンマイ国際園芸博とタイの園芸事情

鈴木 邦彦

タイ・チェンマイで開催された「ロイヤルフローラ・ラーチャブルック2006」(会期2006年11月1日～2007年1月31日)は、タイ国王の在位60周年と生誕80歳を迎えるお祝いとを兼ねた国際園芸博覧会である。A1クラスの国際園芸博覧会は、アジア圏では1990年の日本(大阪)、1999年の中国(昆明)に次ぎ、3回目となる。

2006年11月9日～15日、この国際園芸博とチェンマイ郊外ランプーン県メータで35haの農場経営をしている、花葉会の先輩である斉藤正二氏(昭和39年卒)を訪ねる7日間の日程である。総勢20名、花葉会からは鈴木(司)、長岡、小澤、熱田、山田、鈴木(邦)各幹事が参加した。

●11月9日(木) チェンマイへ向かう

8時45分、成田国際空港にて、なじみの顔、また初参加のメンバーと挨拶を交わし、結団式で気持一つにし、定刻11時15分、機上の人となる。

時差は2時間、6時間のフライトで、タイ・バンコクに到着、現地時間15時30分。チェンマイへの乗り継ぎに約4時間の待ち合わせ。

20時45分、目的地チェンマイによろやく到着。ホテルにチェックインしたのち、さっそく近くの屋台レストランでお好みの料理をとっての夕食。タイ名物のナイト・バザールを散策しながら、ホテルに戻る。

●11月10日(金) 花博会場へ

チェンマイは、約710年前の王朝の首都として栄えた落ち着いた街である。

園芸博覧会会場は、面積80ha、1昨年浜松で開催された浜名湖花博の1.4倍、参加予定国32カ国、入場者目標200万人を掲げる。

9時30分に花博会場到着。まずは会場の約半分を巡回トラムカーで約40分、ゆっくり外郭を見学する。

中央に位置しているEXPO Centerに集合し、屋内展示場で日本政府ブースを担当している、(財)日本花普及センターの原田氏、そして今回お世話になる斉藤正二さんと面会。

EXPO Center会場内の特別展示コーナーではちょう

どこの時期、愛知県が紹介され、「MATSURI(祭り)～花の舞～」をテーマに愛知の花(キク・盆栽・ランの鉢物)を展示。盆栽と、キクなどで装飾された牛車が注目を浴びていた。

屋外展示では「日本庭園」が特別出展されていた。富士山を模した「縮景」という技法で表現した池泉回遊式の庭園を箱根植木の若手職人が手入れ作業をしており、ハッピー姿と脚半のイデタチにさかんにフラッシュを浴びていたのが、印象的。

タイ国民はロイヤルカラーである黄色のTシャツを着て国王に対する崇敬を表す風習があり、会場内がほんとうに黄色一色、驚かされる。

園路周辺の植栽には、竜などの形のブーゲンビレアのトピアリーなど、実に手入れが行き届いており、目を楽しませてくれた。



チェンマイ花博 ロイヤルパビリオンを望む亀甲模様の花壇



チェンマイ花博 みごとなランの展示

展示のほとんどが屋外である。ランの展示は日本では屋内でしか見ることが出来ないものが、見事に、屋外で咲き誇っている様には、驚嘆する。

会場は34～37℃、まるで真夏の様相のなかでの視察見学は、その日差しの強さに悩まされる。地元の見学者が、遮光の小さな日傘をさしているのが頷ける。

18時ホテル着。夕食は、タイ北部の郷土料理と民族舞踊を鑑賞しながらのカントークディナー&ショウに、斉藤さんご夫妻も加わっての宴会となる。

●11月11日(土) いよいよ斉藤農園へ

9時、市郊外の**チェンマイ花市場視察**。間口2間ぐらいの店が路を隔てて、日本のやっちゃ場のような雰囲気、鉢物草花、ラン類、陶器、置物、庭木そして噴水、睡蓮鉢など水周りのガーデン用品が所狭しと並べられ、その種類の多さにガーデニングが盛んな国であることに納得する。

また、植木鉢がいずれもテラコッタ特有の茶色をしているが、実は粘土で焼かれたものにペンキで茶色に色付けしているところに遭遇。改めてタイの鉢の質が判ったことは、新しい発見である。

私は、所属していた英国王立園芸協会のキッチンガーデンクラブの会員から頼まれた、トウガラシとナスの種子を買い求めるのに奔走。小さな缶に入ったもの、絵袋のもの数種類を見つけた。

ラン園のなかでの昼食後、メーリム渓谷にある象の飼育場を横に見ながら、**シリキッド女王植物園**を訪れる。入口からさらに、20人乗りのトラムカーに乗り換えて山の中腹まで移動し、大きなガラスハウスを見学。多肉植物、ペゴニア、熱帯睡蓮、熱帯樹木など。約2時間それぞれ分散して見学する。

その後、斉藤農園「**プーディン・ブンマイ**」へ。高速道路を使って約1時間半、16時、ようやく到着。「ようこそプーディン・ブンマイへ」の横断幕と、斉藤さん一家、現地の従業員の人達に温かく迎えられる。ここは、チェンマイ市から南へ約50キロ、ランブーン県メータの標高450m、約17年かけて順次広げて、現在の敷地面積約35ha、広大な開拓農場となる。

陽が落ちないうちにと、斉藤さんの案内で農場視察。主な作物はアデニウムやカラジウム、カラー、クルクマなど、主に海外へ輸出。組織培養で苗を生産し、日除け程度の簡単な施設で生産するもの、露地栽培するものが中心。農場の前庭には、インドボダイジュの大

木やタビビトノキ、プーゲンビレヤの並木があり、ちょうど夕陽が沈む幻想的な風景に思わず足を止める。

敷地内は昔懐かしいオート三輪車「ミゼット」の荷台に立ち乗り。思わずタイムスリップした感じである。途中、荷台の定員オーバーのせいか砂を噛んでしまい、全員降りて「ミゼット」を後から押す一幕も。

農場の高台から見渡す風景は、くじらが横たわった形に見立てて鯨山と称する山を借景にしたもの。斉藤さんは日本の里山風景を思い出すとのこと。敷地内に日本からの年金生活者を受け入れるというユートピア計画の話は、全員その夢の実現を思い、耳を傾ける。

その後、宿泊するバンガロー (HUT HAUSE) にそれぞれ分かれる。バンガローは、高床式のバナナの葉を葺いた三角屋根2棟の中央部分にシャワーとトイレがついたもの。少数民族カレン族の人が住居として使用している形式そのものである。

陽が落ちて、夕食歓迎会は長岡団長の挨拶で始まるも、斉藤さんのシナリオ通りに運ばず、いつのまにかキャンプファイヤーには火がつけられ、参加した子供達もかってに手作りの花火を爆竹のように鳴らし、進行役の斉藤さんもあきれ顔。中央広場には、トラックの荷台に大きなスピーカーを据え付け、その前に簡単な舞台がつくれ、従業員による少数民族の舞踊や民族楽器の演奏で大いに盛り上げてくれた。

また、ロイ・クラトン祭り (一週遅れの盆のお祭り) を視察団全員が審査員になって人気投票を行い、従業員全員と共に盛り上がる。このクラトン (灯籠) は、バナナの幹を輪切りにしてオアシスとし、バナナの葉で周りを覆い、色とりどりの花でアレンジし、デザイン性、独創性を競うもの。良い思い出となった。

ハイライトは、竹を4本立て、高さ10mぐらいの上



斉藤農園「プーディン・ブンマイ」にて、参加者一同と斉藤一家

空に大きな輪っかを作り、熱気球をくぐらせる競技を楽しむもの。熱気球は直径50cm、和紙で作った煙突状の袋の下にバナナの木の輪切りに灯油を染み込ませて点火したもの。この熱気球がまるで、ゆらめく星のように満天を彩る。

約20球挑戦したなかで、私が挑戦した一つがこの輪っかを潜り抜けた。この視察団が無事に遂行されることを象徴すると、皆の喝采を浴びたことは、忘れることが出来ない思い出となった。

最後に、全員でクラトンのろうそくに火をつけて、裏の池にそれぞれ願い事をして流し、斉藤さん一家、農園従業員総出の温かいおもてなしの歓迎会を終了。

●11月12日（日）パタヤビーチへ

朝8時、正面の横断幕を背景に記念撮影後、あわただしく出発。空港までは高速道路で1時間30分、チェンマイより1時間のフライトで、バンコクに12時に到着。

午後、市内の**チャトチャック花市場**を見学。鳥居さんが30年前に植物園協会の視察で訪れた際に当時珍しかった「夜来香」の鉢植えを見つけて感激したことをバスの中で、披露される。

35℃の炎天下の野外見学と、冷房の効いたバスの移動とで、全員が少々バテ気味。車窓からは、ヤシの木の畑とタピオカの敵が延々と続き、伸延工事中の高速道路を一途、宿泊地のパタヤビーチに向かう。

陽の落ちた18時ようやく宿泊地のロイヤルクリフビーチリゾートに到着。

●11月13日（月）トロピカルボタニカルガーデン

7時30分、外がしらずむのを待って、ビーチに下りて散策。薄暗い中、海水浴姿の観光客を見つけ、リゾート地に来たことを実感する。日本の海岸線ほど広くなく、波打ち際はせいぜい3mぐらいの砂浜で、表面の数cmが細かい小石と貝殻の層で、その下に細かな砂。ちょうど沖縄の「星の砂」の鳴き砂に似てキュッキュッと鳴き、歩いていて気持が良い。記念にペットボトルに砂を入れて持ち帰る。

8時30分、いよいよ最終宿泊地バンコクへ出発。途中、斉藤さんのお勧めの**ノンヌクトロピカルボタニカルガーデン&リゾートパタヤ**を視察。会場では、民族舞踊と象のショーを楽しむ。終了後は、整備された植物群の園内を散策。特に圧巻だったのは、さまざまなヤシの並木と、一番奥にレイアウトされたフランス式庭園のサンクンガーデン。デザインされた刈込み植



ノンヌクトロピカルボタニカルガーデン&
リゾートパタヤのサンクンガーデン

栽のカラーグラデーションの素晴らしさとその大きさに感銘を受けた人は私ひとりではないと思う。

いよいよ最終目的地のバンコクに向かう。

21時30分、皆ぐったりして、投宿のホテルに到着。誰も最後のバンコクの夜を見学する元気はなくバツタンキュウの状態。

●11月14日（火）タイ最終日

早朝4時、オプションで花市場視察。マリーゴールド、センニチコウ、バラ、ジャスミン、デンファレなど、花の頭だけが量り売りされていた（そうである）。花輪用である。タイは敬虔な仏教国。街角や庭先にタイ独特の仏や精霊を祭る祠があり、きれいな花輪がたくさん供えられていた。

最後に王宮と涅槃の像で有名な「暁の寺院」の見学に向かう。王宮の中庭で、タマリンドのきれいに傘型に刈り込まれた植栽と実に目を奪われ、また暁の寺院に向かうバンコクの市内に横たわるメコン川を渡し舟に乗っての往復では、水の都の一端を味わうも、流れがきつく水も茶色に淀んでいたのには閉口した。

最後の夕食は、タイ料理で有名なタイスキを囲む。ツアーの無事終了と、花葉会主催の視察ツアーでの再会を約束して、地元ビールとタイ料理に舌鼓。23時30分、最終便のJALで機上の人となる。

翌15日6時53分、定刻通りに成田に到着。



王宮中庭のタマリンド